＜1000年つづく毛原の里づくりプロジェクト＞
～集落×ICTで、ちいさな見守りから大きな安心を～

毛原の棚田ワンダービレッジプロジェクト代表
水　口　一也

【 プロフィール】

・水口一也(みずぐちかずや)　　毛原の棚田ワンダービレッジプロジェクト代表
連合京都北部地域協議会　事務局長

１９５８年福知山市大江町毛原に生まれ、高校卒業後会社員として福知山市内で１５年間勤務、その後休職し労働組合の専従役員として大阪市内・京都市内で１５年間勤務の後復職。５０才を機に転職し京都市内で営業マン。２０１１年に地元へＵターンし、労働団体専従役員。２０１５年１２戸２８名の毛原住民と９名の関係人口（村外村民）のメンバーにより、地域活性化グループの「毛原の棚田ワンダービレッジプロジェクト」を設立、その代表を務め「１０００年つづく毛原の里づくり」をビジョンに掲げて地域づくりに取り組み、現在「集落×ＩＣＴ」を展開中。

地域の紹介

福知山市の大江町毛原集落は、酒呑童子の鬼伝説が伝わる大江山連邦の麓、丹後と丹波の境に位置し、集落の峠には江戸時代の初期まで丹後宮津と丹波福知山とを結ぶ主街道であった元普甲道(もとふこうみち)の石畳の名残が残っています。

標高１００ｍ～２００ｍに位置し、周囲を山に囲まれ、勾配の斜面を活用した棚田の稲作が中心に営まれ、約８ヘクタールの農地に約６００枚の棚田が広がっています。１９９９年に、自然流下による天水を貴重な灌漑用水として活用した昔ながらの営農や、災害防止機能、景観等が評価され「日本の棚田百選（農林水産省)」に選ばれました。

現在１２戸２９名が暮らし、高齢化率６２％で年々上昇中です。高齢化小集落のため、棚田景観の維持や日常生活においても、自助の力だけでは困難となりつつあり、これからは、高齢者が高齢者を支える時代、住民同士が助けあう共助の力を付けようと日々模索している未来に前向きな集落です。

集落

棚田

地域づくりに取り組むきっかけ

約３０年前に３年間をかけて集落での話し合いが重ねられました。その話し合いは、かつては１３０名近い住民が暮らしていた集落でありましたが、年々人口減少が進み、４０名足らずになってしまい、過疎・高齢化による集落・農地維持への不安が増す中での「集落の将来像」についての話し合いでした。

当時の記録によりますと、その際に一つの気づきに行き着いたとあります。「集落外の都市住民との交流を受け入れる気質が生まれると多様な将来像を描ける」であり、今振り返ると、この「気づき」が今日の毛原集落の特質である「都市住民を受け入れ、交流活動を大切にする」という思いが住民に根付いている根源ではないかと考えています。

１９９７年には、棚田農業体験ツアー田植え体験・稲刈り体験が実施され、以来毎回１００名を超える都市住民の方との交流活動に取り組み、今日まで継続実施しています。（現在は毛原の棚田ＴＡＩＫＡＮツアーに名称変更）

１９９８年には、遊休農地への対応として、棚田オーナー制度を開始し、今日では約１０組のオーナーに稲作に携わっていただいています。２００７年には、森の恵みを受けている私達ですが、高齢化とともに荒れた森林が増えており、森を守り育む運動である「京都モデルフォレスト運動」に取り組むことにし、企業との連携を始めました。

田植え体験会

稲刈り体験会

止まらぬ過疎化に住民が危機感

イベント実施による都市住民との交流や関係人口増の取り組みによって、３組の移住・定住者につながったという実績はありますが、依然として過疎・高齢化の流れは止まりませんでした。

２０１４年には、１２戸２８名に減り、今後の棚田の保全管理が危ぶまれるとともに、集落機能自体の維持・低下に対して、住民の中に再び危機感が生まれました。

集落外のメンバーを加えた
地域活性化グループの設立

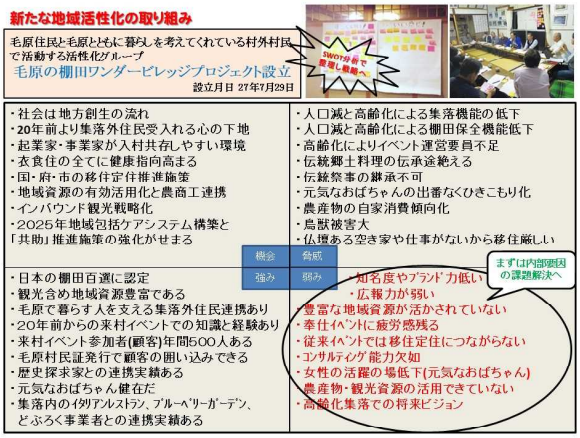
住民が危機感を持つ中、２０１４年福知山市・京都府からの働きかけもあり、農林水産省の「美しい農村再生支援事業」の活用についての検討を幾度も重ねた結果、住民に不得意な分野である「ソフト事業」については、集落外の力を借りることにし、本事業に取り組むことを決定しました。その実行組織として、２０１５年７月に、毛原住民と関係人口(私たちは村外村民と呼んでいます)のメンバーにより、「毛原の棚田ワンダービレッジプロジェクト」という地域活性化グループを立ち上げ地域活性化の取り組みを開始しました。

取り組みにあたっては、地域づくりに実績のあるＮＰＯの力も借りながら進めていくことにしました。

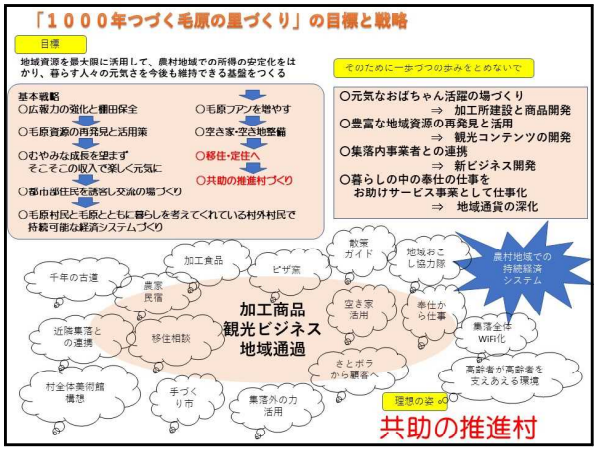
2015年度(初年度)から２年間

取り組みの最初は、まずは住民と村外村民で現状認識の共有化をはかり、地域の「強み・弱み」について洗い出し、ＳＷＯＴ分析で見える化を行いました。そして「弱み」に分類した課題を克服する取り組みを行うことにしました。

議論を重ねた結果「１０００年つづく毛原の里づくり」を毛原集落のビジョンに掲げ、集落の理想の姿として「共助の推進村」をめざすことにしました。



SWOT分析



目標と戦略

「弱み」の課題克服のために始めたのは、

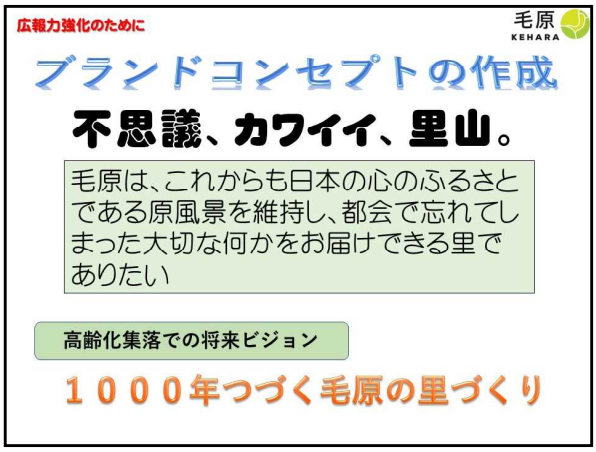
① 将来ビジョンを定め、ブランドコンセプト、毛原住民憲章の制定と関係人口の皆様へ村民証を発行しました。

② 毛原のロゴ・ポスター・パンフレット・マップを製作し、マスメディアへの発表を行いました。

③ ホームページ・ＳＮＳを開設し、地域情報の発信を開始しました。

④ 地域のシンボルとなる水車小屋を建設、ピザ窯を手作りし、ピザ窯体験と棚田散策を新イベントとして導入しました。

⑤ 行政広報紙への掲載と全国移住ナビへの登録を行いました。



広報力強化①

広報力強化②

広報力強化③

2017年度(3年目)から２年間

２０１７年には、広報強化の一環を兼ねて、クラウドファンディングに取り組み、その資金を活用し、食品加工施設を建設。加工所の運営を開始しました。

最初に手掛けた開発商品は、かつて昭和の頃の毛原女性グループが開発した商品を約３０年ぶりに秘伝を伝授し、復刻版として商品化した「黒豆の粕漬け復刻版」です。福知山市の「エエもん」にも認定いただき、いきいきとした女性の活躍の場になっています。

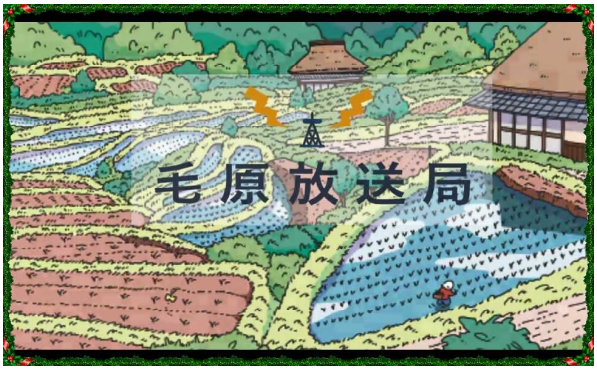
さらに、地域通貨「けーら」を製作し、運用を開始しました。主にイベント参加者やボランティア参加者の再訪を願って、プレゼントとして配布。また、住民間において、今まで奉仕として行ってきた作業を、地域の仕事と位置付けて、地域通貨を循環させるべく運用を開始しました。

２０１８年には、毛原放送局(Ｙｏｕｔｕｂｅチャンネル)を開局し、地域の魅力を動画で配信。さらに、ドローンによる空撮でプロモーションビデオを製作。代々伝わる地域の昔話しを基にした創作民話集の製作。有名和菓子店の入村を機に遊休農地でのヨモギ栽培。新イベントでは、棚田の里黄昏コンサート、民家の縁側を順番にお借りしての縁側喫茶の開設に取り組みました。

この縁側喫茶は、棚田景観を楽しみ、ゆったりと流れるスローライフを楽しんでいただく思いとともに、集落にとっては、ご来店いただく方との交流という目的で実施していますが、一方で地域に長く暮らしているお年寄りの方だからこそ貴重なお話を聞くことができるという役割もあり、高齢者の方にも一緒に地域づくりに参画していただけるイベントとなっています。まさに高齢化集落の強みを生かした取り組みです。

黒豆の粕漬け復刻版

地域通貨



毛原放送局

新民話集

縁側喫茶

2019年度(5年目)から現在

２０１９年度より、村民と村外村民の共助&協働ネットワークによる生活支援の取り組みを展開しています。地域住民から不安の声を聞きとると、ゴミ出しの集積所まで自動車がないと出しに行けず、運転免許を返納した高齢者世帯などではゴミ出し等の一つをとっても困難な状況になっている。高齢者を支えるべき若者が圧倒的に少ない実態にあり、人的労力が不足している。高齢化小集落のため、災害時の避難行動などの災害対応への不安も大きい。

住み慣れた地域で安心して暮らし続けたいものの、年々歳を重ねる中で身体的に不自由になってくることを実感し、将来不安が増大している。という「不安」を多くの住民が感じている実態がわかりました。また、歳とともに長時間の作業ができなくなってきた草刈作業、汗水かけて育てた農作物も一晩のうちに荒らされるイノシカ対策など約６０項目にわたる困りごとが集まりました。地域住民や村外村民に加え、ＮＰＯ、行政(地域包括支援センター)、社会福祉協議会、民生委員の専門家の方々にも参画いただき、地域住民を含めたワークショップの中で、困りごとの解決策を出し合い、出来ることから実施していくこ

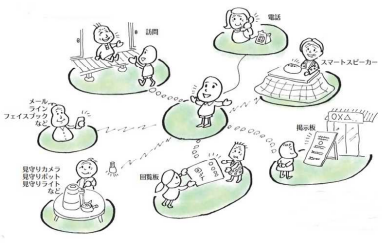
とにしました。

ワークショップ

集落×ICTで
ちいさな見守りから大きな安心を！

すべての困りごとを一度に解決することは不可能なため優先順位を定めて取り組むことにし、その第一としたのが、見守り事業です。これからは、高齢者が高齢者を支える時代になっていくことから、支え手の負担を少しでも減らせられるよう、「ＩＣＴを活用した地域づくり」に取り組むことにしました。

ＩＣＴの導入にあたっては、ＳＮＳのメッセージ機能、見守りポット、見守りライト、スマートスピーカーを住民手分けで試験実施に参画いただき、検証と評価をする中で落ち着いたのが、声と画面で確認ができ、高齢者にも優しいということから、スマートスピーカーを導入することにし、そのための財源は、クラウドファンディングを活用することにしました。



コミュニケーション

困りごとを解決するアイデア

スマートスピーカーの活用事例

２０２１年１月には、屋外を含めた集落全体のＷｉ－Ｆｉ化を完了し、２月に全戸にスマートスピーカーを設置し運用を開始しました。運用開始とともにスタートしたのが、地域情報の共有です。

共有カレンダー機能を活用し、ゴミ出しの日、自治会情報、食品加工所の作業日、防犯の日や交通安全の日を登録し、啓発活動にも活用いただいています。

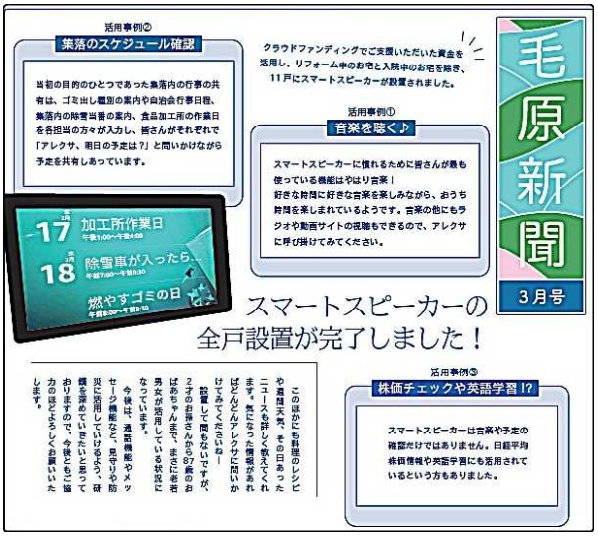
どんどんとスマートスピーカーに話しかけていただき、慣れ親しんでいただくことが、後々の「見守り」への活用に大切になってきます。

８０歳を超える高齢者家庭でも、地域情報の検索に限らず、毛原バス停留所の出発時刻の検索や音楽配信サービス、居住地域の天気予報など、楽しみながら活用していただいているようです。

そして現在では、テレビ電話機能の活用に向けてスキルアップ講習を実施しています。坂道ばかりの棚田集落ですから、足腰が悪いお年寄りの方には、お隣りに行くのも大変です。ついつい引きこもりがちになりますので、顔を見て話が出来るデレビ電話を活用してい

ただこうとするものです。

住民の中には、さっそく、新型コロナウイルスの影響で、遠方で暮らすお子さんやお孫さんとの出会いがなくなってしまい、画面をを見ながらお孫さんとの会話を楽しんでいるという方もいらっしゃるようです。



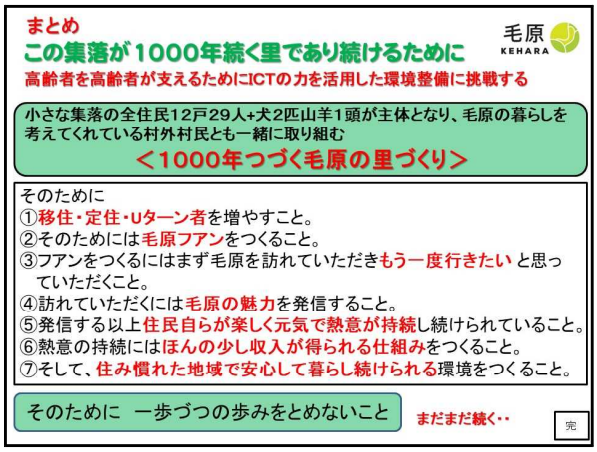
毛原新聞3月号

まとめ

毛原集落は、高齢化率から限界集落と位置付けされる集落ですが、消滅村とならないよう、共助の推進村をめざして、１０００年つづく毛原の里づくりプロジェクトを推進中です。一度ぜひお越し下さいお待ちしています。

◎お問合せは

k. mizuyan0409@gmail. com（水口）まで



まとめ

毛原の歳時記